日本語音声表現法

SPEECH AND RECITATION

斉藤 由美子【著】

桜楓社

著者略歴

斉藤　由美子（さいとう　ゆみこ）

1960年　関西学院大学文学部英文学科卒業
　　ラジオ関西アナウンサー
　　国際日本研究所日本語講師を経て，
1979年　関西学院大学大学院文学研究科日本語
　　学専攻博士課程後期修了
現　在　梅花短期大学国語科助教授
　　関西学院大学文学部非常勤講師

日本語音声表現法

1990年2月10日　初版一刷印刷
1991年3月20日　初版三刷発行

著　者　©斉　藤　由美子
発行者　坂　倉　良　一
印刷所　㈱朝日精版印刷

発行所　㈱　桜　楓　社
〒101　東京都千代田区猿楽町 1-3-1
Tel.　03-3295-8771(営業)
03-3295-8774(編集)
(振替)東京 6-18020

造本には充分注意しておりますが，落丁・乱丁などございましたら，小社かお買い上げ書店にておとりかえいたします。
ご意見，ご感想がありましたら，小社編集部までお寄せ下さい。

ISBN 4-273-02350-4 C 1081
定価はカバーに表示してあります。

日本語音声表現法

SPEECH AND RECITATION

斉藤　由美子　著

江苏工业学院图书馆
藏书章

はしがき

本書は，大学における話しことばの教育と，そのプログラムの設定を模索しながら，講義と実習を通してまとめたものの，レポートである。近年，話しことばへの意識と関心はますます高まってきている。情報過剰の社会，管理化された社会では，自分の考えを的確に言い表し，ことばによって他者と触れ合い，人間的なつながりを深めることが，いっそう大切だと認識されているのかもしれない。

ほんとうのコミュニケーションとは何か（一章），どのようなメカニズムによって人間は音声を発するのか（二章），日本人にとって共通語とは，方言とは（三章），スピーチやディスカッションの実習から学ぶものは（四章），詩や文学作品の朗読でことばの感性は養えるか（五章），以上のような視点から，人間の音声による表現について考えてみようとしたのが，本書の構想である。

執筆に当たっては，先行の諸文献から直接間接に多くの恩恵を受けた。また，話しことばの実例や朗読のための詩なども数多く引用させていただいた。あわせて謝意を表したい。なお，本文に引用させていただいた詩・小説などは，体裁の都合上横組みとした。一言お断り申し上げる。

出版に際し，平成元年度，梅花学園の研究出版助成の配慮をいただいた。また，国語科の同僚，大田正紀先生，桜楓社の飛鳥勝幸氏から，多くの援助を受けた。それぞれを銘記し，厚くお礼申し上げる。

平成元年12月

斉藤　由美子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　次

はしがき …… 3

第一章　話しことばの表現 …… 7

第一節　ことばの機能 …… 7

1．ことばの機能　7

2．話しことばの特徴　9

3．コミュニケーションについて　14

4．美しい話しことば　19

第二節　パブリック・スピーキング …… 24

1．話しことばの形態　24

2．ことばの変化　26

3．マス・メディア時代のことば　28

4．パブリック・スピーキング　30

5．待遇表現　37

第二章　日本語の音声 …… 43

第一節　音声器官 …… 43

1．発音と発声　43

2．音声器官　44

第二節　日本語の音声 …… 51

1．子音　51

2．母音　65

3．音声と音素　75

4．日本語の音素　79

第三節　日本語の音節 …… 82
1．音節の種類　82
2．音節の構造　86
3．五十音図　89

第三章　共通語と方言 …… 93

第一節　共通語と方言 …… 93
1．標準語について　93
2．標準語と共通語　95
3．方言　98
4．民話の方言　101
5．階層方言　105
第二節　日本語の音調 …… 107
1．アクセントについて　107
2．日本語のアクセント　108
3．イントネーション　114
4．プロミネンス　116

第四章　話しことばの実践 …… 119

1．スピーチ　119
2．ディベート　128
3．パネル・ディスカッション　135
4．電話　139
5．面接　145

第五章　朗読 …… 149

1．朗読法　149
2．朗読の試み　154
3．詩の音楽性　158

4．詩的言語　165
5．詩の朗読　167
6．ストーリーテリングについて　171
7．ストーリーテリングの試み　175
8．正しく美しい音声表現のために　179

参考文献 …… 193

第一章　話しことばの表現

第一節　ことばの機能

1．ことばの機能

ことばを媒介として営まれる人間の言語行動には，「話すこと」「聞くこと」「書くこと」「読むこと」，そして「考えること」がある。これらの行動は，人間が他者と関わりながら，互いに人間として生きるための基本となるものである。われわれはことばによって思考し，自己の意思や感情をことばによって表出する。伝達も，また，それを受容し理解することも，ことばによってなされるのである。ことばなしには，人間の生活は一日も成り立たないといってもよい。たとえ，一日中だれともことばを交わさなくても，文字を用いて読み書きしなくても，われわれの思考と感情は，たえずことばによって活動しているのである。ひとり過去を回想し，未来の計画を立て，自己の内面を見つめ，さまざまな思いに耽る時，われわれの精神を基本的なところで支えているのが，ことばである。このことばは，内面的自己と外的刺激に挟まれた，意識の海に漂っている表象である。この表象がいくつかの概念に分割され，それらが再び有機的に結合して，まとまった思考を形成する。人間は，その人の内部に蓄積されていないことば以上のことは思考できない，といわれる。ことばは，コミュニケーションの手段であると同時に，人間の精神活動そのものなのである。

表象が言語化され，記号として表出される方法には，文字による場合と音声による場合とがある。いずれも言語記号として表現・伝達・理解という，

言語行動　表出　伝達　理解　表象　言語記号

ことばの大切な機能を担うが，一般に文字を媒介とすることばを*書きことば，音声を媒介とすることばを*話しことばと呼んでいる。人類がこの地球上に棲息し始め，ものやことを認識し，他者との交流を必要とした時からことばは存在した，と想定できる。原初のことばは，言うまでもなく音声による話しことばである。話しことばを*一次的言語，書きことばを*二次的言語と呼ぶのは，書きことばは話しことばの模写，延長だという考え方による。人類の歴史は約五十万年だと推定されているが，象形文字（漢字），楔（くさび）形文字，甲骨文字など完成された文字の歴史はほぼ五千年であり，書きことばの歴史は，話しことばの歴史の約百分の一にすぎない。人間の話しことばの壮大な時間は，われわれの想像をはるかに超えているが，ことばは営々として人類とともに歩み，精神と文化を形成してきたのである。

情報化時代，国際化時代といわれる今日，コンピューター言語，通信衛星などの技術革命，二カ国語，三カ国語を自由に話し，*媒介語なしにコミュニケートする国際人の出現は，たしかに人間とことばとの関係を拡大し，多様化し，スピード化している。しかし，表現・伝達・理解ということばの基本的機能に変わりはないのである。音声と文字によることばの世界に，現代のわれわれも生きているのであるが，人間の一日の言語行動に費やす時間は，「話し，聞く」ことが，「読み，書く」ことのおよそ四倍だといわれるように，日常生活でのコミュニケーションは，ほとんど話しことばによって行われている。

話しことばは書きことばと比較して，特に学習するものではなく，自然に獲得していくものだという考えが強く，日常生活の中で「話し，聞く」行動に意識的になることは稀である。一度自分自身の話しことばについて，たとえば，だれと主に対話するか，対話の内容は何か，快い対話であったか，自身の思いがきちんとことばとなって表出できたかといったことを反省してみよう。また，「聞く」行動についても，講義，スピーチ，講演などが正確に理解できたか，友人のおしゃべりを気持ちよく受け容れられたかを確かめてみよう。話しことばとは，時間の線条に沿って流れ去っていく，一回性のも

書きことば　話しことば　一次的言語　二次的言語　媒介語

のであるゆえに，このように意識を置いてみることで，いかにそれが，人間生活と深く関わって機能しているかが再認識されるはずである。

「話す」行動と「聞く」行動とは，常に一対をなしている。話し手と聞き手とが，ある場面の両極に立ち，一定の時間，ある話材について，音声によることばでやりとりをする。ここに初めて「話し，聞く」という言語行動が遂行され，これを*コミュニケーションと呼ぶ。日本語には厳密な意味でのcommunicationの訳語はないといわれる。*「伝達」を一般に用いるが，これは一方通行の意味合いが強くて，“*communicate”という動詞の古い用法である“*share with”の「共にする」「分かち合う」の意味から外れるのである。日本語や日本文化の概念の中に，そもそもcommunicationなるものがないのだという議論もある。通達・通知・通告・告知・伝達など，一方通行の概念をもつことばがほとんどである。いずれにしても，コミュニケーションとは，互いが人間としての理解の上に立ち，ことばによって通じ合うことである。たとえ同一の見解に到達しなくても，そこに新しい何かを発見する，そういう人間関係を生み出す時，ことばの機能は十全に発揮されたといえよう。

2．話しことばの特徴

「言語は*場面である」といわれる。特に音声を媒介とし，時間の線条に沿って流れ去る，一回性の話しことばは，場面と切り離して考えることはできない。まずことばがあって，そのことばをどの場面に置くかというのではなく，場面があって初めてことばが発生するのである。場面とは，話し手と聞き手，二者の関係，二者を取り巻く空間と時間，その話題，文脈，そういった一切を含み，また音声に付随したイントネーション，アクセント，プロミネンスや，*非言語的要素の身振り，表情，態度なども含むと考えることができる。話しことばは，これら場面への依存度が高く，場面がことばの不足を補うことが多い。

コミュニケーション　伝達　communicate　share with　場面　非言語的要素

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

次に挙げる話しことばの例は，ある女子大学生の談話を文字化したものである。書きことばとの違いを観察してみる。

例(1)

「今が一番充実しているっていう感じです。やっと自覚が出てきたっていうか，芝居がどんなものか分かりかけてきている。……演出の先生の注意が，うまく言えないけど，しばらくして，こうゆうことなんだ，って突然ひらめいたり，うん。今度の公演，「清十郎の恋」なんですけど，近松の，ことばはそのまま古いことばを生かして，近松のことばを，踊りや歌や筋の運びのアレンジで工夫してある，若い世代の感覚にもぴったりくるように。……何でも自分たちでやってますから，お稽古していない時間もフル回転，もう何が起こってもやっていけるっていう感じです。どこでも眠れるし，何でも食べられるし，シーツ一枚からそれらしい衣装やなにか作ってしまうし。でも，学生もやってるでしょ，不安てゆうか，この時間の終わりがどうなるかって思ったりもして，いろんなこと犠牲にしないと，芝居をずっと続けるのは難しいなあって……。」

（岡田　彩さんの談話）

いわゆる主語と述語を備えた，論理的な文を整った表現というならば，例(1)の話しことばによる談話は整わない表現，つまり*不整表現だといってよいだろう。書きことばによる文章との違いは指摘するまでもないが，まず，主語や文末動詞の*省略がある。また，文と文とを論理的に繋(つな)いでいく接続詞も省かれており，前後の脈絡なしに唐突に話が転換している。思いついた話が*挿入され，話が飛躍する。表現に*重複がみられる。語順が，正しく文法に則っていない，つまり*倒置表現を用いている。文字化した話しことばを分析してみると，このようにいくつかの不整表現が見いだされるのである。

しかし，実際に非公式ではあるが，対面してやりとりされる話しことばは，話し手の，インタビューアーへの誠実な応答ぶり，笑顔，声のトーンなど，ことば以外の場面に助けられて十分にその機能を果たしている。ことばのみで自立し，意味を伝達しなければならない文章表現との相違がここにある。不整表現がむしろ，話しことばを話の現場にふさわしい，生きた表現にして

不整表現　省略　挿入　重複　倒置表現

いるのである。

岡田彩さんの談話は，インタビューアーがあいづちを打ち，控え目な促しを送ってはいるが，ほとんど独りで話を構成している。人間はややもすると自分自身について語る時，ためらいや恥じらいや照れといった心の表情が，その言語表現に表れてくるものである。「言い直し」「言いよどみ」「言い足し」「言いさし」などが，文字化して文章にしてみると，論理の危うい不整表現になるのである。また話しことばの根本的な条件は，その音声が時間の上に繰り広げられるということにあり，次々に流れ去っていく語句や文を記憶のうちに止められない。さらにまた，瞬時にして自分の思いや考えを，適切なことばを選んで表現していくのは難しい。あらかじめ準備し，構想を練り，それを読み返し推敲できる文章表現と，草稿なしの談話との間には大きな隔たりがある。しかし，話しことばの場合，場面が十分にそれを補うのである。

例(2)

黒柳「もともとあなたが株に手をお出しになったのは…」

板東「あ，おやじが…株…契約金で…」

黒柳「野球の契約金？　あなたの野球の契約金で？」

板東「すってしまいましたからねぇ，これとりかえしたろう思って，そらあ，もう，野球なんかそっちのけでしたからね。あれ昭和三十六，七年ですからね，そらまだあの…当時は今みたいな携帯ラジオゆうのはないですからね，ちっちゃくないですから，これくらいの，ほいでイヤホーンがこう白っぽい黄色いようなあれがついてて，だからもう，そらあ，」

黒柳「株式市況　聞きながら？」

板東「聞きながら，そりゃあ，そう，ですよ，四時ごろから行くと，後場の最後のやってくれる，（中略）今ならまあーね，ウォークマンみたいなの自分でもってますが，当時はだから，それで株をやりまして，ほいで，勝ってそのビルをこうたんですよ。」

黒柳「じゃやっぱり取り返した，お父様がすった分は…」

板東「そうそう，おやじのそれは――取り返した，しかし」

黒柳「今，今はどうなの？　あなたの株は…」
板東「いやいや，しかしぼく，このところはべつに…そんな…」
黒柳「少しはやってるでしょ？」
板東「でも…今度は負けましたね，こないだの暴落の時，ちょっとやっぱり負けましたですよ。」
黒柳「ああ，そう。」
（「徹子の部屋」テレビ朝日　黒柳徹子と板東英二との対談）

音声による話しことばを文字化することはできても，場面の臨場感を再現することは容易ではない。それは特に非言語的な要素，対談者二人の身振り，表情，態度が，驚き，可笑しさ，訝（いぶか）しさ，好奇心，賛意，親しさなどのさまざまな感情を表し，それらが話のテンポ，展開，声の調子に影響して，言語表現を規定していっているからである。人間のコミュニケーションにおいては，顔の表情，声調といった*非言語的要素が圧倒的に重要であって，実に93％を占め，ことばそれ自体はわずかに7％を占めるにすぎないという研究報告もある。少なくとも例(2)を見るかぎり，文字化されたものからは，あの対談のおもしろさ，なまなましさは半分も伝わってはこないし，二人の個性はほとんど消されてしまっている。場面とともにあることが，話しことばの不可欠の条件となる。

単独で話を展開していく例(1)と比べると，例(2)の場合は対話という形をとっているので，二人が共同で文脈を整えていくことになる。ある程度一定方向に向かって行かないと，話が通じなくなり，混乱が起こってくるはずである。ここでは，時には意気投合したり，感心したりしながら，話をどんどん運んでいっているが，けっして整った論理的な表現とはなっていない。やはりいくつかの不整表現がみられるのである。まず，*文成立の条件だといわれる主語，述語の揃った文は一つもない。助詞や助動詞が省かれ，文末まできちんと言い切られていない。つまり，一人が言い終わらないうちに，最後の語句をもう一人が引き取って続けるというパターンが目立つ。二人が共同で一文を成立させているのである。

非言語的要素　　**文成立の条件**

二人が*共同で文脈を作っていくのが，対話の特徴である。例(2)のようなインタビューアーとゲストという関係で，文脈が積み重ねられていく場合には，質問と応答が繰り返されていくのであるが，二人の間柄，個性，対談の内容や形式によってさまざまなヴァリエーションをもつ。質問を言い終わらないうちに答えが返ってくるのは，リラックスした二人の親しさの現れであり，性急な好奇心の現れであり，話したいという逸(はや)る気持ちの現れである。話の後半を引き取って続け，二人で一文を完成させるのも，互いに相手の状況や性格，ことば癖などを十分知っているからこそである。また，対談や対話では，相手の最後のことばをそっくり繰り返すことがしばしば起こる。それは，確認の意味を込めたり，強い肯定の気持ちを表したり，一瞬相手の勢いに引きずられたりといった*場面の制約によるのである。さらに，話しことばに最も特徴的な倒置文は，最大の関心事が思わず口をついて出るからであり，時間の線条に沿って流れ去っていく話しことばは，意味を整えていくために次々とことばを補っていくことになる。ここに倒置という不整表現が現れてくるのである。

対談や対話において大切な役割を果たすのは*あいづちである。あいづちには，「ええ」「はい」「そう」「それで」のようにことばとして発言する場合と，頷(うなず)きや視線によって了解や促しのサインを送っていく場合とがある。話し手にとって聞き手のあいづちは，時には話の方向や内容に重大な影響をあたえることにもなる。あいづちは聞き手の積極的な態度の表明なのである。「徹子の部屋」の黒柳さんは聞き上手だとの評判である。たしかに相手の話にじっと聴き入り，視線を送る。そこには話の内容に対する感動が込められていて，たたみかけられる質問にも相手は快く懸命に応答している。あいづちは，単にことばの上だけの問題ではなく，話の相手に対する好意と関心の現れであり，コミュニケーションの基本ともいえるものである。

しかし，あいづちにも文化の違いがあるといわれる。アメリカ人と比べると，日本人は対話の場合あいづちを打つ回数が極端に多いという。相手の話が完全に済むまでは，あいづちによって話の腰を折らない，視線を合わせて

共同の文脈　**場面の制約**　**あいづち**

きちんと聴き取る，それがアメリカ人のコミュニケーションの作法なのである。「言いよどみ」「ためらい」に助け舟を出す日本的な思いやりが，かえって弊害になる場合もあるのである。

音声による話しことばにはさまざまな特徴がみられる。この話しことばに意識的に注意を向けてみること，それがよりよいコミュニケーションへの最初のステップになる。

3．コミュニケーションについて

広い意味での「コミュニケーション」では，人間の意思や感情を伝えるためにあらゆる方法が用いられる。俳優や画家や音楽家は，身体の動きや色彩やメロディーを，コミュニケーションの手段にしてメッセージを送る。そして，観客や聴衆が，送られてくるメッセージに心を動かされ，共感を覚え，応答する時，そこにコミュニケーションが成立することになるのである。

コミュニケーションは，人間と人間とのことばのやりとりに限定されない。生の空間でのあらゆる行動，ものやことへの反応のすべてがそれに当たる。コミュニケーションを一つの定義の枠にはめ込むことはできないが，人間的コミュニケーションという場合には，互いが，知識や興味，行動や意見，思想や感情をことばによって分かち合う，その過程を指していう。実際には，その過程には，言語コミュニケーション*と，ことば以外の要素による非言語コミュニケーション*とがあり，両者は不可分の関係にある。特に，ある場面での個人的な話のやりとりでは，顔の表情，態度，声の調子などの非言語的な要素が大きな役割を果たすことになる。

コミュニケーションで忘れてならないことは，話し手（送り手）のメッセージに対する聞き手（受け手）の応答であり，分かち合いの過程でのお互いの理解である。この共同作業*が行われてこそ，コミュニケーションは完成する。舞台の芝居や音楽も，観客の励ましや好意や共感といった反応によって，その日その日の演技や演奏が変わってくるという。コミュニケーションは，一

言語コミュニケーション　非言語コミュニケーション　共同作業

方的なメッセージに終わるのではなく，聞き手，受け手の積極的な参加があって，初めて本来の目的が果たされ，人間が人間らしく生きていくための大切な働きを担うのである。

人間の日常の言語行動の中で，話しことばによるコミュニケーションは，大きなパーセンテージを占めている。われわれは毎日，家庭や職場や学校でさまざまな人々と出会い，ことばを交わし合っている。いつもと変わらぬ挨拶やとりとめもないおしゃべり，何かの相談ごとや意見交換など，それの及ぶ範囲はきわめて広く，このような私的な場面でのコミュニケーションが，人間生活の基本を支えているといえる。

人が人とことばを交わさずにはいられない，その拠りどころはどこに求められるだろうか。自分の意思や感情を表現し，他者にそれを分かってもらいたい，何かの情報を届けたい，賛意を得たい，意見を聞きたい，自分の望む行動をしてほしいなど，自己の内側からの欲求に衝き動かされるもの，それが要因であることにはちがいないが，やはり，人と人との触れ合いが，互いの心を慰め，生きる張り合いをあたえることを知っているからではないだろうか。時には，それが不快なことばを投げ合うことになり，互いを傷つけ合うことになったとしても，無関心で生きるよりは救いがあることを知っているからではないだろうか。

よりよいコミュニケーションのあり方は，話し手と聞き手が，それを共同作業だと認識するところにある。聞き手の存在があって，初めて話し手のことばは意味をもつ。話し手は聞き手に対して誠実に自分を開き，聞き手もまた，話し手の呼吸に合わせて誠実にそれを受け容れる，分かち合いが理想のコミュニケーションである。一対一の会話の場合，*テニスボールにたとえられることがある。それは，打っては返し，打っては返す弾むボールのように，聞き手によってしっかりと受け止められ，的確に打ち返されなければならない。ボールを独り占めしてドリブルする，*バスケットボールのようであってはならないし，聞き手が打ち返せないような，強烈なパンチを自分だけで打ち続ける，*ボウリングのボールであってもならないのである。これは，コミ

テニスボール型　バスケットボール型　ボウリング型

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com